神さまのお恵み

Kamisama no Omegumi

佐藤愛子

Sato Aiko

PHP

神さまのお恵み

佐藤愛子

神さまのお恵み

1992年11月20日　第1版第1刷発行

著　者　佐藤愛子
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町3番地10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431

組　版　朝日メディア㈱
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

© Aiko Sato 1992 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。
ISBN4-569-53773-1

神さまのお恵み◉目次

神さまのお恵み　7
夏が過ぎて、そして秋　33
怪談石切(いしきり)が原　71
岸岳城(きしたけじょう)奮戦記　97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

玄界灘（げんかいなだ）月清し　129
花子の場合　163
清らかな娘　189
孝行息子　213

装幀――亀海昌次
装画――桑原伸之

神さまのお恵み

神さまのお恵み

1

藤山咲子女史は二十六の齢から五十九歳の今日まで三十年余り、小説を書きつづけて来た。もっとも三十年余りといっても、初めの十年は雑誌社から注文されて書いていたわけではなく、自分勝手に書いていただけである。書かずにいても誰も困らないし文句もいわない。いやむしろ、家族の者は書かずにいてくれる方がよっぽど有難いと思っていたことだろう。

しかし女史は必死で書いていた。当のない原稿を、である。いや、当がないからこそ、必死で書いていたともいえる。「末は女文豪」を目指していたのだ。

だが意気に燃えていた十年が過ぎると、もう何でもいい、文豪でなくてもいい、ものを書いて飯が食えれば、という気になった。たまたまその頃、女史の夫は事業の失敗で破産したのだ。文豪などを目指していると飯が食えない。女史はヤケクソになって破産した夫の悪口を書いた。それが女史が小説家として生れてはじめて手にした原稿料である。

破産した夫は債権者から逃げ廻っているうちに酒場の女と仲よくなった。それで女史はまた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そのことを書いて原稿料を稼いだ。そのうち夫は酒場の女の家に引き取られ、女史と離婚したので、それも原稿料の種になった。

酒場の女と暮しはじめた夫は、時々女史の所へ金の無心に来た。

「何のために別れた亭主に金を貸さなくちゃならないのよ！」

怒りながら、女史は金を出し、すぐさまそれを小説にした。夫はいろんなホラ話を持ち込んでは女史から金を巻き上げて行った。その都度女史はそれを書き、気がついたら女史は「職業作家」といわれるものになっていたのだった。

考えてみると女史は、夫のおかげで職業作家になれたのである。もともと、それほどの才能、創造力があったわけではなかったのだ。そう思うと女史は、別れた夫が、

「やあ、元気かね」

といって現れるたびに、

「なに？　またお金？」

仏頂面をしながら、餌を待つライオンのように、舌なめずりせんばかりの光った眼を夫に向けるのだった。

そのうちに別れた夫は現れなくなった。

彼の生活は安定したのである。

すると、その代りのように、女史の家の離れにロック狂の甥夫婦が住みついた。その離れ家

は女史の老母が住んでいたもので、老母が死亡したため、甥夫婦が来ることになったのだ。
甥は無職で、売れない挿絵を描いて、洋裁師の妻に養ってもらっている。無職なので昼近く起き出してロックのレコードをかけ、それに合せてドラムを叩く。そのドラムとロックの響きは空に向ってたちのぼり、二階を書斎としている女史の耳の中になだれ込む。
「うるさいッ！　静かにしてよ！」
と女史は二階の窓から顔をつき出して怒鳴るが、噴火のように下の方から湧き上って来る大音響の中に、女史の声はかき消えてしまう。しかしそんな憤怒をも女史は小説に書くことによって生活の糧（かて）とした。
そのうち女史は三つ齢上の男と恋愛をした。男に妻子がいたので、お定まりの騒動が持ち上った。それも幾つかの小説のモトとなった。やがて恋愛は終りを告げ、終れば終ったでまた書けた。
ある日、女史の家へ白昼強盗が入って来た。強盗は短刀を手伝いの女の子に突きつけて威したので、女史は庭を走り、塀を乗り越えて隣家の庭に飛び降り、助けを求めて走った。そうして疾走しつつ、
——シメタ！　書ける！
と思ったことを女史ははっきりと憶えている。強盗は女史の勢いにびっくりして逃げたのだが、そのいきさつは五日後にははや五十枚の小説になっていたのだった。

女史のまわりでは、なぜか次から次へと事件が起きた。来月は何を書こうかと考えていると、七十四歳の元村会議員というじいさんが栃木県から結婚の申し込みに現れたりした。

毎晩十時になると電話をかけて来て、愛を告白する頭のおかしなラーメン屋がいた。彼は女史の外出を門の前で待ち受けていて強引に女史の車に乗り込もうとしたので、女史は手にしたこうもり傘で彼を殴った。そのいきさつも、早速、翌月のK誌に掲載されたのであった。

女史はこれらの事件や人物を、神さまの贈物だと思うことにした。元来、才もなく学もない女が、男に頼らず、女の痩腕で老母の余生を看とり、娘を育てていることを神は憐れと思召して、これら珍奇な人物を配して助けて下さっているのかもしれない。

女史の上に襲いかかって来るさまざまな困苦災厄はすぐさま「メシの種」になる。失敗、喧嘩、裏切られたこと、嘘をつかれたこと、侮辱されたこと、盗まれたこと……普通の人が口惜しがったり悲しんだりする時に、女史は「シメタ！」と思った。

「シメタ！　書ける！」

そうしてシメタ、シメタ！　と思っているうちに口惜しさも悲しみも消えてしまうのだった。

2

——あの頃はよかった……。

この頃、女史はそう思うようになった。

女史は書くことがなくなって来たのである。

女史は才能が涸渇してしまったのだ、というよりも乏しい才能を補塡する波瀾が起らなくなったのだ。

女史は齢をとったのである。

かつては女史の前に引きも切らずに現れた人物たちはどこへ行ってしまったのか。

七十四歳の元村会議員、こうもり傘で殴られたラーメン屋、まするお派出夫の志願者、天才作曲家を自負している高校生、自分は女史の隠し子であると信じていた青年……。

——あの頃はよかった……。

と呟く時、女史の胸はいうにいわれぬ悲哀に閉ざされた。今は恋の相手どころか、アタマのおかしい男さえも近づいて来なくなっている。

女史は机に原稿用紙を広げ、呆然として数刻を無為に過す。女史の応接間にはもう、かつてのように各誌の編集者が集って来ない。彼らは女史の衰退を見抜いたのだ。

女史に原稿を頼みに来るのは、今はK社K誌の編集者・金原猛ひとりである。金原猛が女史の担当になってからもう二十年経つ。当時新入社員であった彼は、今はぶ厚いメガネをかけた中年男になって相変らず平の編集者である。彼の同輩の中には既に編集長やデスクになった者もいるのに、なぜか今に到るも平のままでいる。そんな男だけが、女史に原稿を頼みに来ることが、女史には面白くないのであった。

「どうでしょうか、五十枚か六十枚で、人生の哀しさがしみじみ胸に伝わって来るような小説を待っているんですがねえ……先生なら豊富な人生経験を持っていらっしゃいますから、その中から滲み出るものがあると思うんですが……」

「折角だけど金原さん、もう私には書くもの、何もなくなったわ」

女史はすてばちにいう。

「私なんか、もともと、才能なんかたいしてなかったのよ。齢をとって才能もエネルギーも涸れてしまったら、ごらんの通りよ。何も書けない……」

「そんな……」

金原はぶ厚いメガネの下で目をパチパチさせて困惑し、

「そんなことありませんよ。ぼくは昔から先生の愛読者です。ぼくはそのう……何といったらいいかなあ、つまり先生の、その、体当りといいますかね、徒手空拳で人生を戦い抜いて行かれる気魄にいつも感動するんです」

「だからね、その気魄が衰えたのよ」
「そんなことはゼッタイ、ありません！　先生がご自分でそう思いこんでおられるだけです！」
「私の気魄は波瀾や苦労によって出て来たものなのよ。この頃は波瀾がなくなったからダメになってしまったんだわ」
「何か変った人物はいませんか？」
「いないわねえ」
「何か事件、起りそうにありませんか」
「起らないわねえ。とにかく毎日が平和なのよ」
「うーん、平和か……平和なのが困る、というのも、難儀なお仕事ですなア……」
と金原は歎息した。

夏、女史は娘の里子を連れて北海道へ行った。北海道の日高の山の中腹に、女史は七年前から小さな別荘を持っている。建ったばかりの頃は別荘を持っていても、次々に来る仕事のためにそうゆっくり別荘生活を楽しむというわけにはいかなかった。だが今は飽きるほどいることが出来る。

金原は自分の車を運転して、女史と里子を羽田に見送った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com